

# 喬 た ん

雙葉幼稚園 後藤 り ん

喬たんの入園したのは、この四月のことで恰度満三才の時でした。兄さんは茂さんと言つて満四才と六ヶ月です。此小さい兄弟は性質から風采凡ての點に於て曾我兄弟の五郎十郎を聯想させます。家庭の躰け方が宜いと思えて、兩人共にまことに小供らしく爛漫として居る。兄さんは世に云ふ總領の甚六風でなく、沈着伶俐である。弟は未だ何んにも分別せぬ無茶坊さんであるが、それで却々面白く快男幼児なのです。兩人全然性質は反對ですが兄弟仲は至て睦しく、入園當時より今に至るまで兄いさんの側で許り遊ぶで居ます。時々小さい組から迎ひに來られるけれども一向澄したもので……『喬たんは、オ、チイ組』……と言つて振

り向きもしません。何處で遊んでゐるも同じことであるのですから保姆も一向構ひません。他の幼兒も亦一向邪魔にしません。處で此先生なかくの剛情物で、兄いさんの小心翼々たるのはまた反對。それでも幼稚園中の面白い兒として評判なのは、外でもなく、此幼兒は普通の幼兒とは少しく變つて實に面白い氣骨兒だからであります。入園當時は非常に皆さんを困ませたもので、お氣に入りのサヨヤ（女中の名）に附着いたぎり、何でも自分がこうと言ひ出したら、誰が何んと言つても屹度自己主張を遣り通します。それが又却々執拗なので大抵な意志の弱い者では負けてしまひます。泣き出しても、怒り出しても、半日はおろ

か一日でも遣り通して居ます。之は大方サヨヤの根氣負けが喬さんの我意を満たしたに起因して居るらしいのです。なせなれば兄いさんの云ふにはお家でも此通りだから、何時もお父さまに叱られるのですよと。斯ういふ風でそれはくなくの手古摺り者ですが、奇骨がある位だから普通の幼児のやうに初めから猫を被ぶるやうなことはありません。入園直に地金を出して居るのです。ですから矯正は至極仕易いのです。私は最初の日にサヨヤに嚴命しました。「自分で、モ、仕ないと云ふ迄は決して我意を通させることはならぬ。」そして泣いてくそつくり返つて居るのを其儘放擲して置きました。我儘の矯正方は何時も之が第一手段です。それから第二の手段は賛辭です。つまり矯めたり賺したりと云ふので、右幼児の剛情は普通の子を扱ふ手段位ではなかく、利き目がありません。してはならぬと云へば尙ほ爲ると云ふ具合で

一度一寸でも叱れば一日怒つて膨れて仕舞ふのです。倉橋先生の所謂本當にキカヌ子なのです。私は説話などをする時は随分お饒舌りをする方ですが間には小言の時でも何んでも余り多くのを言ひません。それなら體罰を加へるかと言つて、それも殆ど仕たことがありません。それが此幼児に許りには二十年來初めて脊中を一ツ敲いて（但し音ばかり）放擲して置いたことがあります。其日は例の如く一日怒つて居つたのですが、これが矯正の糸口となつて、さあ段々と面白い良い兒に成つて來ました。それから喬さんと云ふものはキカヌなにも従順に服従をする。それで意志が強く、從て獨立忍耐も備つてゐるのですから、益々面白い氣骨兒になつて來たのです。「喬さんは、さう云ふことをなさるのではありません」と云ふと『ハイ！』と力の這入つた、それで何處から出るともなし自然に潔い返事をする。亦其舉動が實に愛

らしい。これは本人其者に接して見なければ却々  
筆紙では形容が出来ません。又喬たんは雨が降つ  
ても槍が降つても未だ一日も休んだことがありま  
ん。雨の降る時は何時も兄いさんと二人限りて車  
に乗つて来るのですが、何時も幌の中で、がたん、  
ことんと言はしてゐます。眞面目に腰なぞ掛けて  
ゐたことがありません。二人で前後左右に動き廻  
つて居ます。それで幌の隙間から時々可愛い、顔  
を出しては覗いて居る。御機嫌の良い時は意味の  
分からぬ自作の唱歌を歌つて来る。偶々其唱歌を眞  
似る人があると、『喬たんの……、トードー……ナ  
イ！』と言つて矯正してくれる。それが幾度教へ  
て貰つても音階、間合が何時も同じに出来てゐる  
が不思議な位で、何を言ふのか少しも判りません。  
又この幼児は非常に想像の強い兒で何か突然思ひ  
出したことがあると、如何なる時と場合を構はず  
話しに来ます。時には眞面目に合槌でも打たうも

のなら、それからそれへと構造して話すが、無論  
聯絡はついてゐまん。それを何にを話すにも接續  
詞と云ふものが少しもありません。『喬たん、チノ  
ー、お花見、ゐつた、』はこの兒の十八番で、初の  
うちは通辯なしではなかく判りませんでした。  
時々兄いさんに聞いて見られるけれども兄いさんにも  
判りません。果て困つた、お家では何時も誰か通  
辯をなさるのですかと、聞いて見ましたら、兄い  
さんの返事が又面白い。『喬たんの話しはお父——  
さまにも、誰——にも判らないのだ。』それでこそ  
吾々は無論判らないのだと大笑ひしました。それ  
でありますから、喬たんは時々自分一人にしか判  
ら無い話しをしてゐることがあります。又喬たん  
は大い組で説話などが初つて若しか自分に判ら  
ないことになつて来ると、ソロ／＼退屈まぎれに  
方々へ出懸けて来て、まんべん無く悪戯をします  
机の下を潜つたり、皆さんの脊中を敲いたり、机

の上に腰をかけたたり、彼方の隅でことごとく此方の隅ではことごとくと遣り出す。それでも別に皆さんから怒られたことは無いが、お話しが佳境に入つた時に余りことごとく遣り出すと『喬たん』小さいお組に往つてらつしやい』と他の幼児から言はれると、慌て、自分の席に付て頬杖をついて澄し込む、其態度の滑稽さは實に形容仕様がありません。又時に依て話しの一端でも耳に通じたものなれば幾度でも自分の氣に濟む迄繰返して聞く。例へば『喬タン、トコ、來タ、』『喬タン、トコナイ』『喬タン、見タ』『デンタ、ゴ、キツタ、喬タン、ツヨイ、タイドーブ』『電車がゴロ〜とゐつたけれども喬たん強いから、あぶなくない』と又喬たんは變りもの、剛情だけあつて如何なる六ヶ敷いことでも一度は必ず一人です。例へば便所に行くことでも、お辨當を片附ることでも、靴を穿くことでも、手細工の様なことでも何んでも

初めから自分に出来ないかと判つて居つても必ず『喬たん、ひといで』を言ひ出す。時々大きい組で畫描きが初まると、喬たんも一所になつて紙と鉛筆を持ち出して畫を書いてをる。何を描いて來かしらんと、待つてゐると何枚でも紙のあるだけ、大きな文字を一つづつ描いて持つて來る。喬たんにもつと外のものを書いてくれと注文いたしますとかぶりを振つて笑ひを湛へて『喬タン、デュー文字、喬タン、デュー文字』言つて何時如何なる時でもこの十文字を描いてくれるのです。又喬たんの一番愛らしい時は双の頬に壓をへこませて笑らう時と、時々兄いさんが脇を傷めて休園する時に喬たんは、たつた一人で來てそれで何時もの自分の席に這入つて大きい者を相手に大人しく遊ぶで機嫌能歸へります時に車の上でさも兄いさんらしい口を聞き〜『オイー、チミ、喬タントコニ來タマイ』といふ時、又喬たんの憎らしい時は

目を三角にして強情張つて怒る時。又一番哀れなことは喬たんは大きい組が好きだけあつて余つ程意氣が投合しなければ自分と同年の者とは遊ばないで、兄いさんの跡許り逐つてゐる。所で兄いさんが遊びに興が入ると喬たんは時々オイテケボリを喰はせられる。すると喬たんはぼかんと立佇んでうらめしさうに眺めてゐる。其時に「お兄いさんは」と聲をかけると、何んの意味も無く、無論涙も出ては居ませんが『チゲタン(兄の名)アトバナイツテ(遊ばぬ)』とじつと其人の顔を視つめてゐる。「アラ……サウデスカ」と云ふと『エ、!』と何んに喩へやうも無い愛らしい聲を立て、返事をするのです。又喬たんの一歩滑稽なことは大きい組が全速力を出して替る／＼徒歩競争や障礙物競争などをして居る時に、喬たんも其中に勝手に雑つて勝手に一人で競争をしてゐる。合圖も一人で『テー、ニー、タン(一、二、三)』と言つて、それで

一人で駆け出して行くのです。兄いさん連が三度も競争を繰り返す時分に、やつと向へ着て何にか拾つたり、彼方此方を見物したりしてやゝ暫してから出發點に戻つて來ます。それでも時々兄いさん連が來ては忙がしい中で息を切らして、喬たんは小さいから、此邊からでよしと言つて履の先で線をつけて呉ると今度は喬たん自分の勝手に思ひ附た處で無暗矢鱈に自分の履の先で線をつける眞似をして亦『テー、ニー、タン』と言つては飛んで行く。又其先きで思ひ出せば又其通りに行つてゆく、そして二三分も経つた頃漸く出發點に歸へつて來ます。それで例の醫をへこませて得意然と一人喜むで跳て居ます。